【編集後記】

私たちは、大変苦しい時代に生きている。世界で観察される差別と抑圧が凄まじく、それに抗う困難がその苦しさの一つである。その上、その世界は冷酷である。戦争やジェノサイドがやまない世界は、被害当事者を苦しめる。イスラエルのガザ攻撃はまさにジェノサイドである。最近ではアフリカのルワンダでもジェノサイドが認定された。しかし、それを我がこととすることが少ない。イスラエルによるジェノサイドは、なぜ許されるのか。西欧諸国では、非難したとしても、ヒソヒソ話に終止している。ホロコーストは、イスラエルの免罪符なのか。本当の知識人と理性とは何か。性懲りもなく、中東やアジアで我が物顔の西欧的理性を猛然と批判することではないのか。

ジョルジョ・アガンベンは「民主主義の成果や労苦を過小評価するという意味ではない。それは、民主主義が敵対者に対して決定的な勝利を収め、絶頂に達したと思われたまさにそのときに、全力を傾けてゾーエーの解放と幸福に努めた民主主義が、そのゾーエーを先例のない破滅から救うことができなくなったのはなぜなのか」と問うた。ゾーエーは、被差別部落と翻訳することが可能だろう。同和行政が去って久しい。それが格差を是正し差別は解消過程にあるとの言説が我々の前に立ちはだかった。だが、メッキはすぐ剥げる。被差別部落民に民主主義が必要だったが、民主主義は何も解決しなかた。現実は、被差別部落のさらなる貧困と存在の無化である。アガンベンの言う通りになりつつあるのか、なってしまったのか。

民主主義は何も解決しなかったというのは言い過ぎではない。民主主義は独裁と同根なのだ。ナチス政権は民主的で正統な選挙によって登場した。似た政権は他にも存在する。独裁を正当化するものとして批判されるカール・シュミットの理論を客観的に捉えると、独裁は民主主義の対抗思想ではなく、むしろ国家の危機を乗り越えるために民主主義を補完する仕組みとして登場したと理解できる。独裁が一時的に必要とするというイデオロギーは、民主主義的な思考や手続きの中から現れることは事実である。国家の危機を脱するために国民の統一した意志が必要だとされるとき、それが民主主義の名のもとに呼びかけられるとしても、もはや独裁の萌芽となる。その理由は、そうした状況では一定の権利が停止され、主権を象徴する存在の出現が避けられないからである。最近の韓国の唐突な戒厳令がそれを語る。

再びアガンベンの登場である。我われが不正義について語ろうとする。彼は言う。「語ろうとする時、きみはいかなる伝統に依拠することもできないし、自由、進歩、法治国家、民主主義、人権といった、耳に心地よい語のどれも用いることができない」。我々は、語る方法が見えず、伝統的でもない西欧的でもない方法論的理性を模索する苦しみにある。この苦しさにこそ出口はある。ジェノサイドに反撃する連帯もそこにある。